

## 27. 唾液分泌量の減少が食塊形成に及ぼす影響(一般講演)(東日本学園大学歯学会第11回学術大会(平成5年度総会))

著者名(日)	渡部 茂, 広瀬 哲也, 五十嵐 清治, 平井 敏博
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	12
号	1
ページ	142
発行年	1993-06-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1145/00007877/">http://id.nii.ac.jp/1145/00007877/</a>

調査したところ以下の結果を得た。

- 1) 正常者におけるSST<sup>®</sup>投与時の全唾液分泌量および耳下腺唾液分泌量は、安静時に比較して有意に増加し、唾液クリアランス能の有意な上昇が認められた。
- 2) 3名の唾液分泌減少患者に対してSST<sup>®</sup>を投与した

ところ、3名とも全唾液分泌量は顕著に増加し、実際に1週間使用させたところ、唾液分泌の促進に伴い義歯使用上の不快事項の改善が認められた。

以上の結果から、口渇緩和ドロップSST<sup>®</sup>の唾液分泌減少症患者への有効性が示唆された。

## 27. 唾液分泌量の減少が食塊形成に及ぼす影響

渡部 茂<sup>1)</sup>、広瀬哲也<sup>2)</sup>、五十嵐清治<sup>1)</sup>、  
平井敏博<sup>2)</sup>、

(小児歯科<sup>1)</sup>、歯科補綴<sup>1 2)</sup>)

唾液分泌量の減少によるxerostomia (口腔乾燥症) では、口腔内環境や口腔領域の諸機能に大きな変化が生じることが知られている。今回演者らはヒトの食物咀嚼が、実験的に唾液分泌量を減少させることによってどのような影響を受けるかについて検討を行った。

対象は健全歯列を有する成人男子で、食物咀嚼実験はchewing-spit法を用いた。使用食物はビスケットおよびソーセージとし、一口量を定め、各3口ずつchewing-spitを行い、嚥下までの咀嚼時間、および嚥下時の食塊水分量を求めた。同様に、咀嚼中の食塊水分量の推移をみるために、嚥下までの1/3、2/3の咀嚼時間でそれぞれの食塊水分量を求めた。次に硫酸アトロピン使用による唾液分泌量抑制下において同様の実験を行い、各々の比

較を行った。

その結果から、一口量咀嚼時間および食塊の水分量は、各被験者とも同一食物では変動が少なく一定した値が得られた。また各被験者間では咀嚼時間にかなり変動がみられるものの、嚥下時の食塊の水分量は比較的一定していた。いずれの食物も咀嚼開始後間もなく(全体の1/3の時点)嚥下時の約60~70%程度の食塊水分量にはほとんど変化は認められなかった。ヒトの食物咀嚼は各人様々であるが、嚥下時の食塊水分量には規則性がみられること、また唾液分泌量減少時には咀嚼時間が延長するが、それは嚥下に適した食塊水分量を得るために必要な調整時間となっていることが示唆された。

## 28. Protein kinase C catalytic domain抗体を用いた耳下腺開口分泌過程の検討

谷本多津由己、佐々木泰裕、金澤正昭  
(口腔外科<sup>1</sup>)

従来から、Protein kinase C (PKC) が、耳下腺のアミラーゼ開口分泌に関与していることが報告されている。我々も、すでにラット耳下腺腺房細胞で、isoproterenol (IPR) とcarbocil (CCH) のアミラーゼ分泌刺激の際にPKC活性の上昇を認め、抗PKC抗体の蛍光抗体法とPKC活性の検討から、開口分泌時にPKCの膜移行が生じることを報告した(第32回歯基礎学会, 1990)。しかし、PKCがどのような機構によって開口分泌を起こすかは不明であり、PKCの膜移行の生理的意味は明らかではない。

そこで、今回PKCの活性化部位を認識する抗体(PKC catalytic domain抗体)を用いて、耳下腺開口分泌過程の局在変化を蛍光抗体法で検討した。

**材料と方法** 材料は、酵素処理により得られたラット耳下腺房を用いた。IPR, CCH, およびPKC activatorであるPMAで処理した腺房について、PKCのcatalytic domainを認識する抗体であるMAb1.9による蛍光抗体法で、開口分泌過程の局在変化を検索した。また、同時に細胞骨格蛋白の変化も検討した。

**結果** 1) 耳下腺遊離腺房をPKCの強力なactivatorであるPMAで処理すると、アミラーゼの開口分泌が観察されるとともにPKC活性の膜移行が認められた。2) 受容体を介した分泌刺激では、CCH刺激でPKC活性の膜移行がみられたことから、PKCを介したアミラーゼ分泌が示唆された。3) PKCのcatalytic domainは、ケラチンフィラメント上に存在しており、PKCの活性化とともに細胞